

巻頭言

新中央図書館の開館と今後の課題

野上 修市*



2001年3月、①都心型②特色ある資料と活動③多面的・効率的なサービスを行うという基本理念を持った「新中央図書館」が駿河台キャンパスに誕生して、早や1年が過ぎようとしている。中央図書館の特徴は、一言でいえば、①「マルチメディア・エリア」の開設②利用者の多様なニーズに応える施設・設備・運用体制を構築したことである。しかしながら、同時に、次のような取り組むべき残された課題もあった。

①図書の一層の充実と個性的な蔵書の収集②電子図書館機能の整備③利用者サービスの拡大④図書館利用リテラシーの強化⑤図書館スタッフの質の向上⑥大学図書館間の密接な連携などが、その代表的な事例である。

①の蔵書の個性化についていえば、地方誌の重点的収集と貴重書の積極的購入は、目下着実に進められている。②に関しては、中央図書館において先行しているが、和泉・生田図書館においても、実現されるべきであると考え。本学では、学術情報に加え、映像・画像等のデジタル情報を利用した教育・研究への対応体制は、いまだ未整備のままである。したがって電子図書館機能の一層の充実が求められている。③については、中央図書館では開館日・開館時間を大幅に増加させたが、和泉・生田図書館ではこれから対応が始まるといった状況である。また、地域住民・社会人に対して、開かれた図書館づくりが望まれる。④の課題は、一応学部間共通総

*のがみ・しゅういち／図書館長／法学部教授

合講座「図書館活用法」が駿河台・和泉に設けられて、それなりの前進がみられるが、なお生田キャンパスでの実施が必要である。加えて、デジタル資料等の有効活用および「本離れ」・「教員離れ」を解消し、また、図書館の良好な学習環境を保つため、正しい図書館利用教育の推進が行われるべきである。⑤に関しては、図書館の良し悪しを決める一つの大きな要素として、図書館スタッフのクオリティを上げることができるが、スタッフ自身の不断の努力と各種の研修に対し、大学サイドの一層の理解が望まれるところである。⑥については、「山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム」が結成され、加盟大学間で図書の貸し出しが可能となったことは、まことによろこばしい。しかし、なお今後とも、大学間の協力体制を進め、利用者サービスの充実、資料の分担保存、商用データベースの共有化などを図る必要がある。

こうしてみると、中央図書館を含む本学のすべての図書館において、また、他大学図書館との連携を一層進めることなど、いまなお取り組むべき課題が残されているといわねばならない。

第62回私立大学図書館協会総会・研究大会が、2001年8月7日～8日に、本学リビティタワーを会場として開催されたことは、その規模においても、また、その内容においても、きわめて大きな意味を持ったイベントであったといえることができる。というのも、大会テーマは、「いま、あらためて『活字文化』を考える」であり、2日間にわたる参加者は、加盟432校から、のべ約1000名を数える盛大なものであったからである。同大会が、活字文化と大学図書館のあり方を全国私立大学図書館関係者にあらためて考えさせる出発の場となったことの意義は、きわめて大きいといわねばならない。しかも本学が、大会当番校の責任を果たすため、駿河台・和泉・生田の全図書館スタッフが夏休みを返上し、本大会に向けて協力体制を確立したことにより、同大会を成功裡に導いたという実績は、本学の今後の図書館運営にとって大きな自信につながるといえよう。

なお、国際協力事業団（JICA）の要請に基づき、ラオス国立大学経済経営学部およびラオス・ジャパン・センター図書館開設支援のため、2次にわたり、本学図書館職員2名を派遣して、所期の目的を達成した国際協力の実績もまた、大きな意味のある行動であったといえる。さらに、新し

い中央図書館の見学者の中に、①中国大学図書館訪日団（2001年9月、15名）②韓国ウルサン大学医科大学図書館館員（同年11月、3名）③タイ国スリナカリンウイロット大学教員・学生（同年11月、35名）④北京外国語大学日本学研究中心図書資料館職員（同年11月、2名）等の外国図書館関係者がいたことは、アジアで本学中央図書館が注目の的になっている証拠であるといわねばならない。したがって、今後とも外国図書館との国際協力・交流を積極的に推進して行く必要がある。

ところで、図書館紀要「図書の譜」は、図書が持つ価値を根源から問い直し、図書館の活性化と充実化につなげて行こうという目的のもとに、発行している。本号掲載の内容が、本学図書館を含む大学図書館の新たな躍進の材料となることを、切に望む次第である。

最後に、本号の原稿執筆にご協力をいただいた皆様方に、心からお礼を申し述べておきたい。